

平成 30 年「北方領土の日」記念大会 記念講演

『北方領土の日』と今年の日露交渉

【講師】 石川 一洋 氏
(NHK 解説委員)

【日時】 2018 年 2 月 3 日 (土)

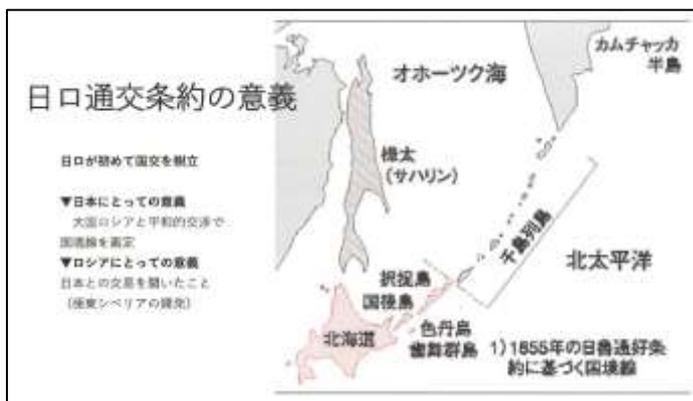
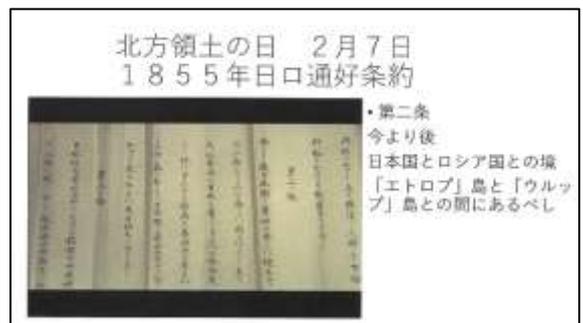


今日は、「北方領土の日」にはどういう意味があるかということと、今年はロシア大統領選挙がありますので、ロシアの動き、それから安倍総理が進める日露交渉の見通しについて、私の知る限りのこととお話ししたいと思います。

私はNHKで約30年にわたり、ソビエト、ロシアを取材してきましたが、その間、さまざまな日露交渉も取材してきました。しかし、未だに北方領土返還は実現せず、日露間で平和条約が結ばれていないのは、大変残念なことです。

【1. 2月7日は何の日か】

「北方領土の日」とは、どういう日でしょうか。2月7日であることは、皆さんもご存じだと思いますが、1855年に日魯通好条約が結ばれ、その第2条の日本語文は「今より後、日本国とロシア国の境は『エトロプ島』と『ウルップ』島の間にあるべし」というものです。大変美しい日本語書体で書かれた条約です。この条約によって国際法的にも北方領土が日本領として画定しました。



その当時、日本にとっても、ロシアにとっても大変意味のある条約でした。どういうことかということ、日本にとっては、大国ロシアとの間で、平和的な交渉によって国境線を画定しました。一方、当時シベリア・極東に進出してきたロシアにとっては、日本との交易を開いたという意味がありました。

当時の日露の全権代表は、ロシア側がプチャーチン提督、日本側が川路 聖謨 でした。双方とも大変立派な人物で、堂々とした交渉を行ったと思います。その当時、ロシアはどういう思惑で、日本との交渉に当たったのでしょうか。交渉が結ばれたときは、既にロシア皇帝が代わっていてアレクサンドル 2 世になっています。プチャーチンを派遣したのは、その前のニコライ 1 世で、そのときロシア側では、鎖国を続ける日本との間でどの

ような交渉をするのかという議論がありました。中には武力をもって脅しつけて交渉すべきだという意見もあったようですが、ニコライ 1 世は、できる限り日本のしきたりに従って、平和的に交渉すべきだとプチャーチンに命じました。

そして、そもそも交渉が妥結する前から、択捉島とウルップ島の間に関境線を引くことでよいという訓令をプチャーチンに与えました。つまり、ロシア側も択捉島以南は問題なく日本の領土だと、交渉前から認識していたということです。

そのときに、なぜ平和的な交渉方針をロシアが取ったのか。例えばアメリカのペリー提督は、それこそ砲艦で脅しつけて交渉したのですが、プチャーチンはそれと対照的な態度を取りました。もちろんプチャーチンの背後には、大国ロシアの武力もあったわけですが、当時のロシア帝国にとっては、交渉して国境線を画定することも大事だけれども、より重要なのは日本との交易を開くことであり、そのためには日本と良好な関係を築かなければなりません。良好な関係を築くためには、友好的、平和的な交渉をしなければならないという認識があったのです。

つまり、極東シベリアの開発のためには、日本との交易が大事だということです。ここに、日中通好条約の当時から今の日ロ関係に通じる、一つの原点があると私は思います。日本にとっては国境線の画定、ロシアにとっては極東シベリアの開発が重要であり、当時のニコライ 1 世の認識は非常に正しかったと思うのです。

今のプーチン大統領は、どこかニコライ 1 世と似ているように感じます。ニコライ 1 世は、1825 年からほぼ 30 年間にわたってロシアを支配し、専制的な政治家といわれました。ヨーロッパでは大変評判の悪い皇帝ですが、ロシア国内では長きにわたって安定した統治を行い、戦争も少なかったといわれています。プーチン大統領も、ロシアの統一については欧米からいろいろと言われてはいますが、ある面では保守反動の政治家という点で、当時、保守反動といわれたニコライ 1 世と似ているところがあります。

ニコライ 1 世が日本との交易を求めたときも、ロシアとヨーロッパとの関係、特にイギリスやフランスとはクリミア戦争を戦っていて、非常に厳しかったのです。今のロシアも、ヨーロッパとの関係が厳しいです。私はそういうときだからこそ、日ロ関係を動かす動機がロシア側にはあると見ています。

【2. 北方領土の今】

ここからは北方領土についてです。

今日は富山県にお招きいただきまして、本当にありがとうございます。

今日はこの場に元島民の吉田 義久 さんも来ていらっしゃいますが、北方領土の開拓に、富山の漁民が非常に大きな貢献をしました。固有の領土というのは、ただ単に地図の上での土地だからではありません。そこには我々の先祖が血と汗を流して開拓し、そこを自分のものにしてきた歴史があります。

特に富山県の功績が大きかったのは、言うまでもなく歯舞群島です。歯舞群島は全く小さな島で、価値がないという言い方をする人もいますが、とんでもない間違いです。今のロシアは、その価値を知りません。北方四島を占拠しているロシアはその価値を知らず、一人も歯舞群島には住んでいません。



去年、自由訪問で歯舞群島の多楽島を訪れた元島民の家族の方は、「昆布が波打ち際に捨てられて腐っているのを見て、涙が出てきた」と書いています。

では、我々はどうしていたのでしょうか。歯舞群島には終戦時5,000人を超える日本人が住んでいて、昆布漁を営んでいました。その多くは、富山県出身者です。

元島民の方が書いた絵には、島じゅうの海岸に元島民が住み、富山から、毎年歯舞に行き昆布漁をした、という歴史が書かれています。これこそが、固有の領土の歴史です。

固有の領土・歯舞群島開発に果たした富山の役割



もう一つ大きな問題になっているのは、元島民の高齢化とともに、北方四島全島には約100の日本人の墓地があります。そのうち、国後島の紗那の近くにある墓地は、町に比較的近く行きやすい墓地ですが、そこでも墓石が倒れている状況があります。航空機墓参でこの地を訪れた元島民で建設業の方がいて、倒れた墓石の大きさや重さの目星を付け、「次に訪れるときは、ぜひともこの墓石をもう一度真っすぐ立たせたい」と言っている方もいます。人が行きやすい場所の墓地でも、こういう状況です。100ある日本人墓地の多くは、周りにはロシア人も住んでおらず、人跡未踏で、どこに墓地があるのかも分からない状況になっています。こうした元島民のためにも、日本人の墓地を行きやすくして、復旧する努力は必要なことだと私は思います。

さて、北方四島の特徴の一つは、非常に美しい自然が残されていることです。国後島、択捉島は、知床半島と地形が似ていて、まるで知床を見ているような趣があります。私がビザなし渡航で訪れたときも、「えとぴりか」という船の真上を、海鳥のエトピリカが飛んで行きましたし、アシボソミズナギドリの大群も見ました。南半球から来た渡り鳥が、海上にいるの



です。国後島から択捉島に行く間には、北方四島で最も高い爺爺岳の姿も船から見えました。他にも、紗那の沖合からは、散布山が見えました。このように、手つかずの自然がまだ残されています。知床半島は世界自然遺産に登録されていますが、北方四島にもそれに勝るとも劣らない自然が残されているのです。

「えとぴりか」から四島へのはしけに乗るのですが、そのはしけのロシア人船員が、我々が島に行っている間に釣りをして、オヒョウとオオカミウオを釣っていました。彼らは「これでも少ないぐらいだ」と言っていました。つまり、それだけ多くの魚がいるということです。羅臼と国後の間では、シャチも見ました。

北方四島には、ヒグマも非常に多いです。知床から北方四島、さらにウルップ島まで、

みんな地形が似ているのです。太平洋プレートが沈み込む場所で隆起してできた島々で、地形的にも全くつながっている地形であることがよく分かります。そこに流水で運ばれた多くのミネラルが豊かな海をつくり、その海をもとに森ができています。

しかし、心配されることもあります。ロシアによる開発が、急ピッチで進んでいることです。国後島のスポーツ施設内には温水プールがあり、そのそばにスパを整えた温泉を、さらに作る計画があります。国後島で働いているのは、大体シベリアのヤクーチアやブリヤートから来た労働者でした。ここは給料の支払いがいいので、出稼ぎに来ているということでした。ヤクーチアやブリヤートはどちらかというとなアジア系の民族で、非常にわれわれと似ています。お相撲さんにも多いタイプの体形をした人がいて、日本人だと分かったら、「おお、ここは、おまえたちの島だったのだね。」とも言っていました。このように、ロシアによる開発が進んでいる現状があります。



択捉島のレジャー用の高級ホテルは、1泊500ドルで20室ぐらいあって、既に外国人宿泊客も何人か泊まったことがあるということです。ただ、食料事情は、スーパーなどを見るとまだまだ十分ではなく、北海道の豊かな食料事情と比べても非常に貧しいです。新鮮なものがほとんどない、という状況です。

【3. 2018年プーチン大統領の戦略】

こういう北方四島の現状を受けて、今年ロシアはどういう動きをするのかという相手側の戦略を説明していきたいと思います。

2018年は、プーチン大統領にとって、とても大事な年です。3月18日投票の、ロシア大統領選挙があるからです。プーチン大統領は、途中で1度退いて首相になっていますが、都合4期目の選挙です。ロシア憲法によると、連続2期以上は務められないので、この任期が、恐らくプーチン大統領にとって最後の任期となります。当選は確実です。プーチン大統領の目標は、得票率70%、投票率70%（70×70）という圧倒的な勝利を狙っています。



なぜなら、まさに大統領選が終わった頃から、ポストプーチン時代への動きが始まるからです。そのときに、権力がレームダックになることなく、維持したまま、後継者に引き渡すのです。そのためには、圧倒的な国民の支持が必要だというのがプーチン大統領の思惑です。

70×70のうち、どちらが難しいかという点、恐らく有効投票のうち70%以上の支持は達成するでしょう。なかなか難しいのは、投票率70%です。ロシアといえども、最近の大統領選で70%を超えたことはありません。結果が分かった選挙の投票に、特に若者を向かわせることは、プーチンにしても難しい面があります。

プーチン大統領はどのような政治家かという点、常に欧米では非常に評判が悪いのですが、一種の天才的なポピュリストです。普通のポピュリスト、人気取り政治家というのは、国民が言っていることを後追いつけるのが普通です。しかし、プーチン大統領は天才的な面があります。つまり、国民が心の中で思っているけれども、まだ分からないことを先取りして言うのです。

最初に出馬したときは、「ロシアの統一と安定」と言いました。2期目のときのスローガンは、「豊かになろう」でした。欧米との対立が始まりそうになると、「愛国心」と言いました。今回4回目には、どんなスローガンや戦略を国民に提示できるのでしょうか。恐らくある種の変化、つまりこれまでのものを守るだけではなくて、新しいロシアの見通しを示さないことには、なかなか若い人は投票に行かないと思います。

プーチンは天才的なポピュリストと言いましたが、例えば、自民党の長期政権の基盤を作った安倍後の池田内閣は「所得倍増」を掲げました。これが、当時の日本人の心を圧倒的につかみました。それと似たところが、プーチン大統領にはあります。それがプーチン大統領の圧倒的な支持につながっているのです。

ただ、さすがに17～18年ロシアを支配していると、停滞感が出てきます。特にロシアの若者世代は、例えばゴルバチョフが改革を始めたときに生まれた世代(今の30～35歳)は1,200万人います。ソビエト連邦崩壊を経験したときに生まれた世代は25～30歳です。ところが、ロシアの問題は、日本以上に少子化が進んでいることです。子どもの数がどんどん減っています。その次の世代になると、700万人少ししかいません。その次のプーチン大統領が就任した頃に生まれた世代は、600万人しかいません。しかし、それにしても30歳未満のロシア人は、全体の1億4,000万人のうち、5,000万人を超えています。この世代の心をどうやってつかむのかということが、プーチンにとって大きな課題になっています。

やはりプーチンの支持は強いのですが、必ずしもみんな満足しているわけではありません。汚職問題や就職難、収入が低いことへの不満を若者たちは抱えています。この十数年間続いたプーチン的モデルは、限界が来ています。そういう中で、どのように次の未来を提示できるのかということが、今回のプーチンの大きな課題になります。

ロシア人の中には、国が間違っている方向に向かっていると思っている人は、今でも結構多いのですが、プーチンに対する支持だけは一定して強いのです。どういうことかという点、欧米には悪の権化のようにいわれるときもあるのですが、ロシア人にとっては、プーチン大統領は圧倒的に良い人なのです。ロシアは人を善悪で分けるのですが、プーチンはロシア人にとって圧倒的に良い人だと思われています。つまり、ロシア国民は現状にいろいろ不満があるけれども、プーチンは我々のことを考えてくれる良い皇帝だという意識が、低いときで60%、高いときで80%を超えるという圧倒的な支持率につながっているのだと思います。

それから、ロシアの特徴です。日本人は大多数が日本人で、日本という国に生まれれば日本人という意識になります。もちろん北方領土問題がありますが、日本の領土といえば

歴史的に日本列島がぱっと浮かびます。日本という国は、日本人、日本語、日本という意識が、非常に一致する非常に珍しい例です。

ところが、ロシアは多民族です。最大多数のロシア人でも、70%しかいません。さまざまな民族が混じり合っていて、一種の帝国といえます。そのロシア人が何を願っているかという、ソビエトのようにもう一度、世界に覇権を唱えようということではありません。それは無理であることは、プーチンも分かっています。では、どういうことを望んでいるかという、世界が、アメリカの一極ではなくて多極化する中で、その一つの極としてのロシアを確立したいということです。

その中で、我々にも非常に影響があるのは、ロシアとアメリカの関係です。トランプとプーチンは、ある面で似ています。一つは、天才的な発信力です。それから、特に、我々マスメディアからの評判の悪いことを言うことを恐れませんが、逆に、そのことによって国民の支持を得ています。




プーチンとトランプ 米ロ対立の継続

天才的な発信力・メッセージ性の強さ・敵を作らない
行動の意外性、予想を裏切る

▼アメリカ ロシアと中国を既存の国際秩序へのチャレンジャーアメリカにとっての脅威「ロシアは偉大な国家としての地位を回復し、自らの周囲に影響圏を築こうと希求している」

▼ロシア 最重要課題 ロシアの主権・統一の維持

アメリカは両国（中ロ）と共通利益があれば分野を超えて協力する用意がある

軍事的、経済的、文化的、情報戦略、社会的な主権

▽軍事力は大国の条件・しかし軍事だけではない

▽経済では資源（原油・ガス）依存経済からの脱却

恐らく、米ロ対立は、今年も変わらず続くでしょう。これをアメリカがどう見ているかという、ロシアと中国は、アメリカを中心とした国際秩序へのチャレンジャーであり、ロシアは、偉大な国家としての自らの地位を回復し、自らの周囲に影響圏を築こうとしています。ただ、アメリカにしても、場合によっては中ロと協力する必要があることは認めています。

これに対して、ロシアの安全保障戦略は、ロシアは、常に自立した国でなければなりません。他の国から影響を受けない、自立した国です。それは単に経済的だけではなく、文化的にも、政治的にも、宗教的にも、自立した国でなければならないという意識を持っています。

ロシアから見た中国

- 19世紀以来初めて中国優位の中ロ関係
- 中国はアメリカと並ぶ超大国への野心を持つ
- ロシアの安全保障にとって
死活的に重要な二国間関係
- アメリカの一極支配打破には協調
- しかし中国の野心には警戒心・

**ロシアのユーラシア と
中国のシルクロードの矛盾は？**

もう一つ大きな要素は、中国との関係です。今の中ロは、戦略的パートナーシップを強化していますが、これはロシアにとって、この2百年間で初めて、自分よりも経済的にも軍事的にも強い中国と向き合っている状況です。つまり、ロシアにとっては、中国との良い関係を維持するしかないという現状があります。しかし、本当に中ロの国益

が完全に一致するかという、ロシアは旧ソ連を自らの影響圏と考えていますが、そこを切り崩しているのは、アメリカでもなくヨーロッパでもなく、まさに中国です。中国の習

近平が掲げる「一帯一路」の中の「新シルクロード構想」は、まさにロシアが影響圏としてきた中央アジアを、中国の影響圏に飲みこもうとしている状況を生んでいます。

【4. 2018年安倍総理の戦略】

そうしたロシアに対し、安倍総理はどのように動こうとしているのでしょうか。

基本は、日米、中ロという相互の関係です。

日米は同盟関係で、中国の脅威を日本は感じています。しかし、最大の貿易投資相手国でもあります。



中ロは戦略的パートナーシップです。米ロは対立しているけれども、核大国としての戦力的対話を維持しています。そうした中で、日米関係を強化することは、地政学的に言えば、日本にとって同盟国であるアメリカ、そして潜在的な脅威でもあり最大の経済関係を持っている中国に対するポジションを強める思惑があります。ロシアも同様です。

安倍総理は、今年、日ロをどう動かすのかというと、日米関係もあるけれども、一つは、今までになく強固な日米関係を維持し、さらに強化していくと私は思います。もう一つは、対立軸が目立っていた日中関係を、恐らく、動かして来るのではないのでしょうか。安倍総理の訪中、場合によっては習近平の訪日によって、日中を動かすのです。そうすると、日米、日中を動かす中で、プーチンに対する安倍総理のポジションを強めるわけです。その中で、日米関係を動かしていくだろうと思います。



安倍政権の権力強化と日米関係 ベトナム・ダナンでの首脳会談



- ・プーチン大統領
「選挙の大勝おめでとう。これで我々の計画がすべて実現できる」
- 「我々の計画」とは何か
- ・安倍の権力基盤強化はプーチンを動かす武器となる

昨年10月、衆院選があり、自民党が圧勝して、安倍総理の権力基盤が強化されました。

日本は民主国家ですから、どのような選択をするかは国民の皆さまそれぞれの考えによりますが、安倍総理にとっては最大の危機だったと、私は見えています。

プーチンの態度が、この選挙を境に変わったのです。9月のウラジオストクでの首脳会談のときは、どちらかというと、安倍総理の足元を見るような態度を取っていました。と

ところが、11月のベトナムのダナンでの会談では「大勝おめでとう。これで我々の計画が、全て実現できる」と言っています。「我々の計画」とは何かということは言っていないが、この言葉の背景には安倍総理の権力が強化されたということをプーチンが認識したということです。これで自民党総裁3選も見えて、プーチンも「2021年までは、この男が相手だ」ということを認め、動きだそうとしているのだと思います。

ウラジオストクでの12月の日ロ首脳会談において、北方領土で早期に実現を目指す共同経済活動の、プロジェクト5項目を決めました。

先ほどからいろいろなあいさつがありましたが、共同経済活動と平和条約を、どうつなげるのでしょうか。経済だけが先行するのではないかという人も多いし、そういう懸念はもつともだと思います。

安倍総理が2016年から唱えてきた、新しい発想に基づくアプローチを具体化したのが共同経済活動であり、それが昨年12月の日ロ首脳会談で合意されました。新しい発想のアプローチとは、未来志向の中で、日ロが四島の在り方を、これまでにない発想で、どのように考えていくかということです。

共同経済活動のポイントは、共同経済活動をどのようにして平和条約につなげていくかということです。私は長く日ロ交渉を取材して、今考えると、ロシア側の1992年の秘密提案などをもう少し生かしておけばいいと思うときもありますが、さまざまな日本側の提案を知っています。その中で、昨年12月の首脳会談の結果が発表になって、共同経済活動の中身を聞いたとき、「川奈提案」に似ていると思いました。

1998年4月、橋本総理が当時のエリツィン大統領に提案した、「川奈提案」というものがあります。「川奈提案」は、いまだ公式には発表されていませんけれども、さまざまな方が書いた本や私の取材によれば、択捉島とウルップ島の間には国境線を引くことです。つまり、1855年の日ロ通好条約と同じです。しかし、四島の施政権は、ロシアに残すのです。つまり、主権は日本けれども、四島を実際に運営する権限や法律はロシアのものだということです。ある種、返還前の沖縄のような状況にするということです。

ただし、大きなところで違いがあります。どういうことかということ、「川奈提案」は、四島一括返還の中でも最大の譲歩案です。なぜ最大の譲歩案かということ、主権は日本に来るけれども、施政権は残すからです。つまり、実際は四島で行政などは全てロシアのままです。主権だけ戻す提案だったわけです。

これを提案して実際に作ったのは、一昨年亡くなられた丹波實さんです。彼に、どういうことか聞いたことがあります。一つは、国境線を画定することには、大きな意味があります。もう一つは、ロシアがこれを認めると、ロシアの現状支配が施政権の面で合法化されて、日本企業が入っていけるようになります。つまり、島内に日本が入っていきません。そうすれば、島はどんどん日本化が進み、時を待たずして施政権も日本に戻ってくる

ウラジオストク日ロ首脳会談



ウラジオストク 日ロ首脳会談
早期に実現を目指す5つのプロジェクト
双方の立場を害さない法的枠組みを検討し、
できるものから実施していく

- (1)海産物の共同増養殖プロジェクト
- (2)温室野菜栽培プロジェクト
- (3)島の特性に応じたツアーの開発
- (4)風力発電の導入
- (5)ゴミの減容対策

各プロジェクトの具体的検討と
全てのプロジェクトに共通して必要となる
人の移動の枠組みに関する検討を加速する

局長級の作業部会を設ける

状況になるということです。つまり、日本企業、日本経済をどのように島に入れるかということが、国境線の画定とともに、「川奈提案」の大きなポイントだったのです。

しかし、残念ながら、ロシアはその提案を受け入れず、原則的な立場は、ますます強固になっていきました。



そこで新しいアプローチは、両首脳の合意として四島の帰属問題は必ず解決するけれども、その合意をどのように解決するかというのが決まらない前に、四島の将来、四島でどのような経済活動をするかという枠組みを決めてしまおうとしたのです。だから、北方四島の共同経済活動でいわれているものには、イチゴ栽培や養殖、観光などがあって、それも意味

はあるのですが、法的な枠組みをつくり、国境線画定前に画定後の世界をつくっていくことが主眼です。共同経済活動の交渉については、来週も日ロの外務省次官級協議を行います。単にプロジェクトをどうするかということよりも、法的な側面をどうまとめるかが、非常に大切です。

いわば、国境線画定が平和条約の肝なのですが、さまざまなその他の分野、例えば人の往来の枠組みや建物を建てる時の法的枠組みを切り分けて、平和条約を切り分けて、部分部分に分けていこうという考え方であり、非常に大胆で野心的なアプローチです。しかし、確かにリスクもあります。

日本の外務省では、現在、条約畑の専門家を交渉に当たらせています。私としては、北方四島は日本固有の領土であるという日本の基本的な立場を害さない形で、共同経済活動の枠組みがうまく進むことを願っています。その中で、もう一つ大事なものは、元々四島に住んでいた元島民の方々、あるいはそのご家族の方々の利益も考えることです。先ほど、100以上ある島々のお墓の、場所さえもかなり分からなくなっていて、墓石も倒れていると申しました。

元島民の方々が四島に行く機会は、ビザなし交流の枠内での、自由訪問や墓参に限られています。もし北方四島での観光振興が行われる場合、やはり私は、元島民の利益として、元島民が行きやすくするように利用すべきだと思います。あるいは、元々日本人が住んでいた場所や墓地を、その中でどのように整備していくのかを考えなければならないと思います。

12月の日ロ首脳会談の声明の中で、私が一番大事だと思うのは、もちろん平和条約に関する双方の立場を害さないことが第一ですが、次は国際約束の締結を含む法的基盤を整備することです。つまり、場合によっては、共同経済活動に関する条約も結ぶことになるかもしれません。

私が言いたいのは、共同経済活動の交渉を平和条約から切り離すのではなく、平和条約につなげるということです。共同経済



活動は何のために行うかという、経済のためではなくて、平和条約締結に一步近づくことに向かっていかなければならないと思っています。

安倍総理は、ロシアに対し、8項目の経済協力プランを提案しました。

我々はアメリカのように、ロシアを敵視したり、孤立化させたりする政策は取りません。ロシアに関与していく中で、平和条約の締結、北方領土問題の解決を目指すことを宣言しているわけです。

【5. 日ロ交渉はどう動くか】

最後に、今年の交渉についてですが、恐らく3月18日のロシア大統領選でプーチンが圧勝します。就任式は5月7日で、プーチン大統領は4期目に入ります。

まだ正式には決まっていますが、恐らく5月24～26日あたりに、安倍総理がロシアのモスクワとサンクトペ

テルブルクを訪問します。一つは「ロシアにおける日本年」の開会式、もう一つはサンクトペテルブルクでの経済フォーラムへの出席が目的です。

しかし、一番大事なものは平和条約交渉です。ここで、第4期プーチン政権、安倍総理の総裁3選をにらんで、日ロ交渉の道筋を付けなければなりません。9月に自民党総裁選があり、その頃にまた安倍総理はウラジオストクに行くでしょう。

今年は、表立って大きく動くことはないけれども、非常に重要な年になると思います。経済活動を軸とした平和条約交渉をどのように動かすか、そして2019、2020年が本当の勝負になると思っています。



<質疑応答>

(Q1) 昨日のニュースで、北方領土の民間空港を、軍用空港にすると出ていました。北方領土はロシアにとって、アメリカなどをにらんだ、極東だけでも一番重要な基地にする方向に向かっているのではないかという見方もあります。そういう動きは、先生が、今、述べられたことについて、どのように影響していくのでしょうか。

(石川) これは非常に大事な問題です。我々としては、北方領土の軍事化は看過できません。

ロシアが、北方領土の中で軍事的に維持したいのは、一つは国後水道です。択捉島と国後島の間にある国後水道は、オホーツク海の戦略潜水艦が太平洋に出ていく上で

重要で、日ロというよりも、米ロ関係の枠組みの中で核抑止力を維持するための一つになります。

軍用空港化は恐らくないと思いますが、択捉島に、軍用飛行機が制度的に着陸できるようになりました。択捉島の新しい空港のことです。それ自体よりも、米ロが対立する中で、北方領土、特に国後島、択捉島の軍事的意味、つまり国後水道を巡る攻防が重要になっています。安全保障でいくと、北方領土そのものが、極東で一番大事な軍事基地になることはないと思います。一番大事なものは極東の方にありますし、北方領土は一種の防衛の前線のような形になっています。

もう一つは、安全保障面で、対立点に今のところなっているのは、ミサイル防衛です。ロシアが、日本のミサイル防衛強化、特にイージス・アショアの配備に、次第に反発を強めています。私はよくロシア人に、「モスクワまで届くミサイルを持った国が、あなたの国の隣に出てきたら、あなたはどうするのか。ロシアだったら、予防攻撃をするのではないか」と言います。すると、ロシア人は何も言わないのですが、我々としては、北朝鮮のミサイルという現実の脅威があるわけです。その中で、イージス・アショア、防衛的兵器であるミサイル防衛を配備するのは、誠に当然のことです。

ただ、これはロシアからすると、「日本が、日本だけで、日本のために運営するのなら、何も問題はない。ただ、本当に、日本のためだけなのか。実際は、アメリカが運営するのではないか」という疑いを持っています。そうすると、ロシアからすれば、アラスカ、日本、ヨーロッパのルーマニア、ポーランドというふうに、自分たちの周りが、アメリカのグローバルなミサイル防衛で取り囲まれます。確かに技術的には、イージス・アショアに戦術ミサイルを取り付ければ、攻撃兵器にも使われるのは事実です。

しかし、これは彼らの認識不足です。我々が、彼らに説明しなければいけないのですが、日本国には平和憲法があります。集団的自衛権は制限された形で認めています。日本のミサイル防衛を、アメリカがNATOのように運営することは、法的には全くあり得ないことです。ただ、ロシアはそういう疑念を持っています。

非常にいい質問をしていただきました。ここの対立点を解消することが、日ロ交渉の一つのポイントとなります。

私はロシアにも、もう少し北朝鮮の脅威に対して、真剣になってほしいのです。ミサイル防衛というものについて、私は、逆に日本からある種のイニシアチブを出してもいいと思います。どういうことかということ、北朝鮮のミサイルは我々が最大の脅威を受けているのですが、長距離ミサイルはモスクワまで届きますから、中国にとっても、ロシアにとっても、アメリカにとっても脅威になります。

だから、日本の次に、恐らく、中国が北朝鮮について懸念していると思います。なぜかということ、中国はロシアからS400という最新のミサイル防衛を購入したのですが、どこに配備したかということ、北京です。これは、明らかにアメリカのミサイルではなく、北朝鮮のノドンミサイルからの防衛です。そうすると、北朝鮮という具体的な脅威に、限定したミサイル防衛で日米中ロの協力ができないかということ、日本が提案していくのが一番いいと思っています。ただ、それにはいろいろな意見があります。これは私の全く個人的な意見であり、政府の考えとは全く関係ありません。

ただ、質問があった安全保障の問題は、領土問題について、大変重要なポイントだと思います。

(Q2) 貴重な講演を、どうもありがとうございました。興味深く、聞かせていただきました。

昨年、私は多楽島に自由訪問し、貴重な経験をしたと思っています。

ビザなし交流のプログラムの中には、例えば択捉島の人たちと現地で交流するプログラムもあると伺いました。択捉島の現地の皆さんは、日本人と交流するに当たって、実際のところ、どう考えているのでしょうか。択捉島の皆さんは、日本でこういった返還運動が活発であることはご存じなのではないでしょうか。交流するに当たって、いずれは北方領土が日本に取られてしまうのではないかとといった、択捉島内の世論など、ご存じでしたら教えてください。

(石川) ビザなし交流、自由訪問で行かれたということは、元島民の関係者の方ですね。

私は、元島民の自由訪問、墓参はもっと拡大していいと思います。これは、人道的な措置です。航空機の問題や法的な面を考えると、かなり無理をしているところはあると思うのですが、これは人道問題ということで、まず一つは元島民の墓参、自由訪問はもっと自由に行われるようになった方がいいと思います。

択捉島での交流プログラムについては、総じて、ビザなし交流の意味という点では、返還運動をしている方からすると焦れたいと思われる方が多いと思います。今のロシア人の島民と日本人との交流集会の中では、あまり直接的に、領土問題は取り上げません。あるいは、ロシア側が嫌がることがあります。しかし、私は、意味があると思います。

私が、島で警察官の家を訪問したら、ロシア人の島民が「日本人とだったら住める」と言ったのです。ビザなし交流が始まった当初は、ロシア側に警戒感が、かなりありました。この二十数年間は焦れたいと思ったかもしれないけれども、領土問題は、別の国であれば、普通は血の雨が降っているのです。しかし、我々は平和的に解決したいということを明確にして、今いるロシア人の島民も招いて、話しています。そうすると、彼らの中に「日本人とだったら一緒に住んでいける」という意識が芽生えてきたことは、非常に大きな成果だと思っています。

結局、四島が日本に、例えば「川奈提案」のような形で返還されたとしても、ロシア人の大多数は残るわけです。そうすると、ロシア人と日本人が、一緒に住んでいかなければなりません。その基盤をビザなし交流が作っているという意味があります。

だから、ビザなし交流はもっと拡大した方がいいと、私は思います。なぜ、これが返還運動につながるのかという疑問があるかもしれませんが、私は日本人の姿を見せて、あるいは向こうの人間を呼んで、日本の文化や生活を知ってもらうことには、非常に意味があると思います。それから、共同経済活動がもし始まったとしたら、そういう意味は大きいと思います。